【連載】
老健仕事人 調理師

厨房から思いを込めて

［第3回 最終回］

恵美須孝平［えびす・こうへい］
介護老人保健施設ひまわり（愛媛県）

前号では2018年の豪雨災害の経験をもとに、当時の状況や災害時の給食対応についてお話をさせていただきました。私が第2回の原稿を書き終えた頃に、今年は静岡や九州、中国地方などで豪雨災害があり、改めて自然災害の恐ろしさを感じました。こういった自然災害は年々増えているだけではなく、その災害の規模や威力が昔では想像できないものになっています。前号でも申しましたが、どんな事態でも迅速に対応できるよう災害時のマニュアルや備えをいま一度確認していただければと思います。

最終回の本号では個人的なお話になってしまいますが、私がこの仕事に就いたきっかけやこれからの目標についてお話をさせていただきたいと思います。

祖母の死を機に

私には90歳で亡くなった祖母がいました。日頃から農作業に明け暮れていた祖母でしたが、80歳ごろから認知症となりその症状は加速度的に進行していきました。

私は大のおばあちゃん子だったため、変わり果てた祖母の姿や奇行を見るたびに大きなショックを受け、同時に優しかった祖母がなぜこんなことになるのかと悔しい思いでいっぱいでした。

私は4人兄妹ですが4人とも実家を離れていたため、祖母が亡くなるまでの間両親にとっても大変な時期だったと思います。それでも、デイサービスやショートステイなどを利用できたことは両親への大きな助けとなり、祖母の余生を支えてくださった施設の方々には本当に感謝しかありません。

祖母が亡くなる1年ほど前、私が食事介助をしたときのことはいまでも忘れられません。私は食事をさせるために寝たきりになった祖母を抱き上げたとき、祖母の身体はとても軽く腕に伝わるのは骨と皮の感触だけでした。それでも祖母が立派だったところは私たちとほぼ同じような食事をしており、目はつぶったままでしたが、時折ニンマリと笑うような表情もみせてくれました。その姿を見た私は、当時のショックや悔しさはなくなり、これまで生きてくれた祖母への感謝と、祖母の人生が終わろうとする始まりの瞬間なのだと感じました。そして、2013年の9月に祖母は自宅で息を引き取り90年の生涯を終えました。

祖母の葬儀には兄妹はもちろん親戚も集まり、何年かぶりに家族全員がそろう機会となりました。当時の私は居酒屋で働いており、日々の激務に心身ともに疲弊しきっており家族全員が私のことを心配していました。そして、実家に帰ってくることを父から勧められ、私は33歳のときに愛媛の実家に帰省することになりました。

いま思うと亡くなった祖母が私のことを心配して、家族全員を集めてくれたのかもしれません。祖母への感謝とともに、私はこれまでの調理師としての経験も活かすために、施設などの調理師として働くことを決意しました。

私が調理師として高齢者の食事を支えていくのはもちろんですが、祖母の死を機に高齢者の方によりいっそう豊かな食事を提供したいと考えるようになりました。戦後の厳しい時代を生き抜き、私たちのいまの生活や日本の礎を築いてくださった大先輩方に食事を提供させていただけることは、私にとって名誉なことであるとともに、限られた余生の食生活を任されることは大変な責務でもあります。

私のこれからの目標

施設のご利用者や高齢者の方に、より豊かな食生活を提供していくため、私は栄養の知識やスキルも身につけたいと考え、この仕事に就く前に2年間学校に通い栄養士の資格を取得しました。いまでは調理師業務とともに献立作成や発注業務も行っております